

3) アネモネ

アネモネはキンポウゲ科アネモネ属の総称である。しかし一般的には鑑賞用として栽培されているものを指す。日本ではこの仲間のものにイチリンソウ、ニリンソウ、アズマイチゲ、ハクサンイチゲそれにシュウメイギク (05-01-06) などがあり、どれも美しい花を咲かせる。アネモネの学名は『*Anemone coronaria*』で、属名はギリシャ神話に登場する女性の名前である。アネモネの原産地はヨーロッパの地中海沿岸で、その語源はギリシャ語の『*anemos*』(アネモス)に由来し、風を意味している。このため英語では『*wind flower*』と呼ばれている。またアネモネはギリシャ神話に登場する美少年『*Adonis*』のセム語だともいわれている。アドニスとは前述の福寿草のところでも触れているとおりで、アネモネと福寿草はそれほど近い関係にあると見ることもできよう。アネモネの別称はベニバナオキナグサ、あるいはアメリカオキナグサで、前述の翁草とも極めて近い。進化の過程でそれぞれ別の種になったのだろう。

さてギリシャ神話では、愛と美の女神アフロディテ(ローマ神話ではヴィーナス)に愛された美少年アドニス(Adonis)が、森の中でイノシシを追い回すことに熱を上げていたが、やがてイノシシに突き殺されてしまう。このときに地面に流れた血からこの花が生えたといわれている。どうもこの話はヒヤシンスと似すぎている。これとは異なる物語もある。西風の神ゼフィルスは花の神フローラの恋人であったが、フローラの侍女アネモネと恋に落ちる。これに怒ったフローラはアネモネを追い出してしまった。しかしゼフィルスはアネモネを探し出して、逢瀬を繰り返す。さらに怒ったフローラはアネモネを花に変えてしまったのだという。ヒヤシンスに登場したゼフィルスはここでも浮き名を流していたわけである。春風がアネモネの花を優しく吹き抜けてゆくのは、今でもアネモネに愛をささやいているからだという。これが英語で『*wind flower*』といわれる所以でもあるのだ。『旧約聖書』や『新約聖書』に出てくる『野の花』はこのアネモネともハーブのカモミールともいわれている。春先に美しい花を咲かせるアネモネを人々はこよなく愛し、永遠の命を託していたようで、ヨーロッパでは復活祭の花として知られ、ドイツでは復活祭の日に雌牛の首をこの花で飾る習慣がある。

アネモネは春早く芽を出し3月から4月にかけて、赤、ピンク、紫、青、白など原色の美しい花を見せてくれる。しかし個体によって花の大きさが著しく異なる。小さいものは直径3cm、大きいものになると花径6cm以上にもなり、一重咲きのほかに八重咲きもある。この花も花弁に見えるのは実は萼片で、本来の花弁は退化して目立たない(05-01-06 シュウメイギク参照)。植え時は10~12月頃で陽当たりと排水の良いところを好み、同じ場所に植えておこなら石灰を施して、前述のクロッカスと同様に弱アルカリ性を保つことが肝心である。植えるときには基肥として、堆肥もしくはよく発酵させた油粕を十分に与えて、花後には追肥を与えてあげるとさらによい。しかしクロッカスと同様になかなか殖えるところまではゆかない。



アネモネの花はギリシャ神話では、美の神アフロディテ(ローマ神話ではヴィーナス)に愛された美少年アドニスが化身して生まれた花とされている(栽培品)。



しかしギリシャ神話にはこの手の話が多く、美しい花はどれも神様の化身なのである。



別の物語では風の神ゼフィルスは、花の神フローラの恋人だったが、フローラの侍女アネモネと恋に落ちる。これに怒ったフローラはアネモネを花に変えてしまったという(栽培品)。



風にそよぐアネモネの花は、人間に何かを語りかけているようにも見える。



アネモネには黄色系と紫系の花はない。しかしこの近縁種を見渡してみると、黄色種にはフクジュソウであり、紫種にはオキナグサがあり、全体で一つの体系を作っているのだろう。



アネモネの花、花芯まで赤いものは稀である(栽培品)。



アネモネの花弁に見えるのは萼片である。神様はこんなにもさまざまな萼片を作り出したことを考えると、その偉大さに感動せずにはいられない(栽培品)。



多重弁のアネモネの花。これも花弁ではなく萼片なのである。

[目次に戻る](#)